

学校推薦型選抜

国語

(問題冊子)

<受験上の注意>

- (1) 試験中は試験監督者の指示に従うこと。
- (2) 筆記用具・時計以外はカバン等に入れてイスの下に置き、机の下に棚には何も置かないこと。
- (3) 携帯電話等のスイッチは切っておくこと。
- (4) 質問等がある場合には黙って挙手をする事。
- (5) 中途退場は認めない。(体調の急変等については、挙手をして申し出る事)
- (6) 試験開始の合図があったら、問題冊子(13頁)と解答用紙(1枚)の枚数を確認すること。
- (7) 受験番号(算用数字)と氏名は解答用紙に記入すること。また、受験番号欄のFF・TT・JJは該当するいずれかを○でかこむこと。
- (8) 解答はすべて解答用紙に記入し、提出すること。解答欄は表と裏の両面にある。
- (9) 解答用紙にある破線の四角内には、何も記入しないこと。
- (10) 解答は鉛筆書き(シャープ・ペンシルも可)とし、楷書で丁寧に濃く書くこと。
- (11) 試験時間は60分である。

(注) 解答はすべて解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。

一 次の文章を読んで設問に答えなさい。なお、設問の都合で一部省略した部分がある。

楽観性 (optimism) は、ポジティブ心理学 (注一) の中核にあると考えられており、これまで数多くの研究知見が⁽¹⁾チクセキされています。楽観性の概念定義は、主として三つの独立した研究分野 (非現実的楽観性、説明スタイル、特性的楽観性) で提案されています。

△中略▽

セリグマン (注二) によると、われわれは自分自身に起きた出来事をどのように習慣的に説明するのかといった説明スタイルをもっているといえます。セリグマンは、その説明スタイルとして、楽観的な説明スタイルと悲観的な説明スタイルの二つを仮定しました。

a

楽観的な説明スタイルとは、自分に起こった悪い出来事に対して、外的 (自分以外にその原因を求める)・一時的 (その原因は一時的なもので、長くは続かないと考える)・特殊的 (その原因を特殊的な理由に求める) に捉えるものです。一方で、悲観的な説明スタイルとは、失敗の原因を内的 (自分にその原因を求める)・永続的 (その原因がいつまでも続くと考える)・

X

(その原因を

X

な理由に求める) なものに帰属することです。

また、自分に起こった良い出来事に対して、内的・永続的・Xに考えやすいのが楽観的な説明スタイル、逆に外的・一時的・特殊的に考えてしまうのが悲観的な説明スタイルになります。

こうした説明スタイルは、経験によって学習され、出来事を楽観的に、あるいは悲観的に説明するスタイルを習得していくとされています。とくに、両親やその他の重要な大人のモデリング行動によって⁽²⁾エイキヨウを受けると考えられています。

△中略▽

ところで、楽観性の高い人は、現実逃避をした見方をしているのではないか、という批判があります。¹、楽観性の高い人は良い面ばかりに目をうばわれて、ネガティブな面を無視しているので、まわりを歪めてバラ色の世界と捉えているのではないか、という考えです。われわれが生きていく中で、ネガティブで脅威的な側面に目を向けることは重要なことであり、仮に楽観性の高い人がそれを行わないのであれば、けっして適応的であるとはいわないでしょう。

この問題に対して、セガストローム (注三) は興味深い実験を行っています。セガストロームは、楽観性の程度によって、悲観性の高い人と楽観性の高い人の三つのグループに分け、彼らがネガティブな言葉とポジティブな言葉にどのくらい注意を払っているのかを測定しました。その結果、予想通りに、悲観性の高い人はネガティブな言葉に、楽観性の高い人はポジティブな言葉により注意を払っていたことがわかりました (図1)。²、ここで最も興味深いのは、楽観性の高い人でさえもネガティブな言葉に対して、ある程度は注意を払っているということです。ただし、ポジティブな言葉とネガティブな言葉を比べた場合に、楽観性の高い人は、よりポジティブな言葉に注意を払っているということになります。

一方、

Y

つまり、この実

験からわかることは、現実離れた見方をしているのは、楽観性の高い人ではなく悲観性の高い人であるということになるでしょう。悲観性の高い人はネガティブなことに固執しすぎて、そこから離れられなくなってしまうので、たとえば過去に起こった失敗にいつまでも引きずられて、前に進

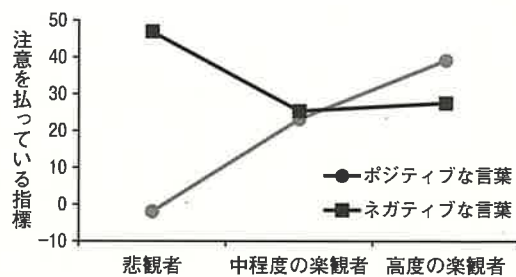


図1 楽観性の程度が異なる人たちがポジティブな言葉とネガティブな言葉にどのくらい注意しているのかの関係。(Segerstrom, 2006)

むことが難しくなるのです。

また、楽観性の高い人は、状況がトウセイ不可能であると認知した場合には、現実を受け入れる傾向が高く、問題を解決する努力からは解放され、感情を管理するコーピング（注四）を使用することが示されています。3、楽観性の高い人は、達成が困難な目標に対しては、その目標に固執することなく、現在の達成水準を許容する状態から、達成できない目標から解放されやすいことがわかっています。

以上みてきたように、楽観性の高い人はネガティブで脅威的な情報に目を向けているのですが、それらを回避するのではなくそのまま認知し、受容することができると考えられます。

（小塩真司編著『非認知能力概念・測定と教育の可能性』より外山美樹「楽観性―将来をポジティブに見て柔軟に対処する能力」）

（注一） ポジティブ心理学：精神的な病理を治療することよりも、より良く生きることや幸福に生きるための要素を研究することを志向する心理学の一領域である。

（注二） セリグマン：マーティン・セリグマンはアメリカ人の心理学者で、学習性無力感の理論に関する研究で有名である。

（注三） セガストローム：スーザン・C・セガストロームはアメリカ人の心理学者で、ポジティブ心理学を支える研究者の一人である。

（注四） コーピング：ストレスに対処するために行われる個人の認知的及び行動上の努力のことである。例えば、ストレスを経験した際に、「誰かに愚痴をこぼして気持ちをはらす」「どうすることもできないと解決を先延ばしにする」など、ストレスの原因に対処を試みることを指す。

問一 傍線部(1)～(3)のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) チクセキ
- (2) エイキヨウ
- (3) トウセイ

問二 空欄1～3に入る語句として最も適切なものを、次のア～カからそれぞれ一つずつ選びなさい。

- ア. つまり
- イ. だから
- ウ. 結果的に
- エ. しかし
- オ. 同様に
- カ. そもそも

問三 傍線部 a 「楽観的な説明スタイル」について、その習得を促進する要因と説明スタイルの具体例を述べた文として最も適切なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

ア. 幼い頃から悲観的な母の姿を見ていたため、仕事で失敗する度に、自分に落ち度があるのではないかと気にしてしまふ。

イ. 大学で専攻した心理学の知識を活かし、仕事での失敗の原因を、自分の努力不足に帰属させすぎないように意識している。

ウ. 両親とも血液型が O 型で、その血筋を引いているためか、私も仕事で失敗をしても「何とかなる」と考える傾向にある。

エ. 辛いことに直面した時には、「止まない雨はない」という父の口癖が自然と脳裏をよぎり、平常心を保つことができる。

問四 空欄 X に入る語として最も適切なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

ア. 中立的

イ. 普遍的

ウ. 中庸的

エ. 不変的

問五 図 1 から読み取れる事柄として空欄 Y に入る最も適切なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

ア. 悲観性の高い人は、楽観性の高い人と比べてみると、ネガティブな言葉のみならず、ポジティブな言葉にも注意を払っていることがわかります。

イ. 悲観性の高い人は、ポジティブな言葉にはほとんど注意を払っておらず、ネガティブな言葉により多くの注意を払っていることがわかります。

ウ. 楽観性が中くらいの人は、予想通り、ポジティブな言葉にも、ネガティブな言葉にも同じ程度の注意を払っていることがわかります。

エ. 楽観性の高い人と楽観性が中くらいの人は、予想に反して、ネガティブな言葉に同じ程度の注意を払っていることがわかります。

問六 傍線部 b 「楽観性の高い人はネガティブで脅威的な情報に目を向けているのですが、それらを回避するのではなくそのまま認知し、受容することができると考えられます」という結論を導き出した研究は、なぜ行われたのか、その理由を、本文中の語を用いて、句読点も含め四〇字以内で説明しなさい。

二 次の記事を読んで設問に答えなさい。なお、設問の都合で一部省略した部分がある。

訂正は、だれもが日常的にやっている行為です。その意味に自覚的になり、現実の変革に活かそうというのが本書の提案です。

そもそも訂正とはなんですか。結論から記すと、訂正の本質はある種の「メタ意識」にあると言うことができます。自分が無意識にやってしまったことに対して、「あれ、違うかな」と違和感をもったり、距離を感じたりするときに、訂正の契機が生まれます。そういう距離感がなければ、そもそも訂正の必要がありません。

ぼくたち人間は、多くのことを無意識にこなしています。水を飲むときにコップをもつ、家を出るときにドアに鍵をかける、電車に乗るときに改札でスマホをかざす……そういうときはふつうなにも考えていません。

X

つまり行動を訂正する必要が生まれる。それが意識の出発点です。そういう意味では、意識するとはすでに訂正することということにほかなりません。

自分の行動を訂正して、外界に合わせていく。それが生きることの 1 です。それは動物もやっていることですが、人間はその訂正の能力をとくに発達させたため、意識をもつようになったと考えられます。

ぼくは人類学や脳科学の専門家ではありません。だからあくまでも素人の考えとして聞いてほしいのですが、「いままではこう行動していればうまくいったけれども、状況が変わってうまくいかなかった、それならばこうしてみればどうだろう」といった、訂正のシミュレーションが意識の起源なのではないでしょうか。そして、最初は意識しながらやっていく行為も、

繰り返されて訂正が必要なくなると無意識のなかに沈んでいく。

言葉についても同じことが言えます。「意識しないで話す」と言うとき突飛に聞こえるかもしれませんが、ひとは仲間内ではほとんど無意識で言葉や口調を選んでいきます。たとえば、リベラル派の仲間内だったら、あまり深く政策について考えなくても、憲法改正や防衛費増額に反対していればなんとかなるわけです。

ところがそこに保守のひとが紛れ込むとそうはいかない。では日本の安全保障はどうするのですか、と正面切って尋ねられてしまいかねない。ここで「考える」ことが必要になります。そして「いまの言いかたでは伝わらないから、別の話しかたをしよう」と試行錯誤を行うことになる。

△中略▽

以上の簡単な説明でわかるとおり、訂正する力とは、^a そもそも生きることの原点にある力です。そして、あらゆるコミュニケーション、あらゆる対話の原点にある力でもあります。

ミハイル・バフチンというロシアの文学理論家があります。『ドストエフスキーの詩学』という有名な本を書いているのですが、そこで対話が重要だと述べています。

ただ、それはふつうの対話ではありません。^b 2 がどういうものかというところ、「いつでも相手の言葉に対して反論できる状況がある」ということです。バフチンの表現で言うとき「最終的な言葉がない」。

つまり、だれかが「これが最後ですね。はい、結論」と言ったときに、必ず別のだれかが「いやいやいや」と言う。そしてまた話が始まる。そのようにしてどこまでも続いていくのが対話の本質であって、別の言いかたをすると、ずっと発言の訂正が続いていく。それが他者がいるということであり、対話ということなんだとバフチンは主張しているわけです。

これはとても重要な指摘だと思います。よくひとは、対話が必要だ、話しあってくださいと言います。でもそれはたいい、なんらかの合意や結論に達するための手続きにすぎません。バフチンは、そういうものは対話ではないと言っている。

言葉を発するとき、ぼくたちの頭のなかには抽象的な 3 が確固なものとしてあるわけではありません。Aさんのなかに 3 があり、それがBさんに渡されて、Bさんがそれを理解するという過程ではないのです。

では対話で起こっていることはなにかというと、むしろ一緒に共通の語彙をつくっていく作業に近い。言葉を交わすというゲームを遊びながら、同時に言葉を使うルールを一緒につくっていくような行為なわけです。

言葉の意味は事前に確定していると思うかもしれませんが、でも意外とそうでもないのです。たとえば意味が確定していても

4 が異なることがある。

たとえばさきほどの例だと、リベラル派は軍の存在について当然のように否定的に語る。けれども保守派はそうではない。

4 が違うわけです。

そのとき、自分はこういう言葉を使った、そうしたら向こうは予想とは異なる反応を返してきた、このままだと対話が成立しないから言葉を変える。そうすると話がさきに進んでゲームが成立する。そういうことを繰り返していくわけです。その調整は終わることがない。それがバフチンが言っていることです。

ぼくは音楽は詳しくないのですが、それはジャズなどのセッションに似ていていのではないかと思います。他人の演奏をリアルタイムで感じ取り、それに合わせて自分の演奏を調整し変化させていく。

そういう身体的なフィードバックを抽象化したものが、ここという訂正する力にほかなりません。

(東浩紀『訂正する力』より)

問一 傍線部(1)、(2)の語の意味として最も適切なものを、次のア～エからそれぞれ一つずつ選びなさい。

(1) シミュレーション

- ア. 綿密に調査を行うこと
- イ. 頭の中で妄想すること
- ウ. 模擬的に実験を行うこと
- エ. 観察して気づきを得ること

(2) 試行錯誤

- ア. 失敗すればやり直すという方針で色々と試すこと
- イ. 何かをする度胸があるかどうかを試すこと
- ウ. 自分に運が向いているかどうかを試すこと
- エ. 困難な状況のもとで信念の強さなどを試すこと

問二

空欄 1

4

に入る語として最も適切なものを、次のア～エからそれぞれ一つずつ選びなさい。

- ア. 基本
- イ. ニュアンス
- ウ. 概念
- エ. 定義

問三

空欄 X

に入る次の(A)～(D)の文の順番として最も適切なものを、後のア～エから一つ選びなさい。

- (A) それは体の不調のせいかもしれないし、外界の状況が変わっているサインかもしれない。
- (B) では、どういうときに「考える」ようになるかというと、無意識にやっていたことがうまくいかなかったときです。
- (C) そのときに「ん、おかしいな」と感じ、外界と調整する必要がある。
- (D) いつもあるはずの鍵がないとか、いつもあるはずのスマホがないとかいうことです。

- ア. (B)→(C)→(A)→(D)
- イ. (D)→(A)→(B)→(C)
- ウ. (B)→(D)→(A)→(C)
- エ. (D)→(B)→(C)→(A)

問四

傍線部 a 「訂正する力とは、そもそも生きることの原点にある力」について、その理由を述べた文として最も適切なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

- ア. 生きるとは、私のもつ意識を他者に受け渡し共通の意識を広げていくことだから。
- イ. 生きるとは、私たちが無意識のうちにに行っている行為によって成立するものだから。
- ウ. 生きるとは、他者との相違を対話によって統一する過程に他ならないから。
- エ. 生きるとは、自分の言動を環境や他者といった外界と様々に調整することだから。

問五

傍線部 b 「それはふつうの対話ではありません」について、「ふつうの対話」とはどういう対話のことを指しているのか、本文の内容を踏まえた具体例として最も適切なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

- ア. 学校の教室で友達ととりとめもなくおしゃべりをする。
- イ. 部活の会議で意見交換をして学園祭の出し物を決める。
- ウ. 家のお隣さんと垣根越しに近所の人のうわさ話をする。
- エ. 友達と夜に通話をしていたら相手が先に寝てしまった。

問六 二重傍線部「訂正の本質はある種の『メタ意識』にある」について、「メタ意識」とはどのようなことか。本文中の語を用いて、句読点も含め四〇字以内で説明しなさい。

(問題終わり)